

古墳時代土玉考
-土玉使用祭祀の様相について-

當 眞 嗣 史

目 次

1	はじめに	415
2	研究略史	415
3	土玉出土事例の検討	417
	(1) 千葉県出土遺跡	417
	(2) 関東出土遺跡	420
	(3) 関東以外出土遺跡	428
	(4) 朝鮮半島出土遺跡	428
4	土玉使用祭祀について	428
5	土玉納置について	431
6	おわりに	433

1 はじめに

古墳時代の竪穴住居跡からは、有孔の球状土製品がときおり出土する。この球状土製品のことを、土玉あるいは球状土錘と呼んでいる。その用途については、不明な点が多々ある。祭祀使用、漁撈使用と想定している説があるが、その出土状況や共伴する遺物等を観察すると漁撈使用としている例の中に祭祀に伴う使用を想定することができる事例が数多く散見できる。

名称と定義について、その球状土製品については、用途から、土玉や球状土錘といった名称を使用している。土玉（丸玉）は土製模造品として祭祀に使用する祭祀具としての玉としていることを想定しており、球状土錘は漁網の錘としての使用を想定している。

以上のように、球状土製品を祭祀具として捉えるのか、漁撈具として捉えるのかは名称を含めて、担当者の考えが直に反映しているといえよう。

ここでは、有孔の球状土製品を「土玉」と捉え、その用途を出土状況（特に炉・カマド周辺）から分析し祭祀具としての用途とした例を中心に扱うものとする。なお、特別に明記する以外は、ここでは土玉は丸玉を指す。

2 研究略史

そもそも祭祀具としての土玉について言及した論考は、管見に及び範囲において、瓦吹堅氏の論考^(註1)のみである。瓦吹氏は、古墳時代などの茨城県茨城町石原遺跡及び周辺の遺跡も含めて出土する土玉の性格について考察された。弥生時代後期から出土し、古墳時代前期の出土率が高く、遺跡によっては、奈良・平安時代まで出土する。出土位置は壁際が多く、単品出土であることを総合的に判断され、これまで、漁具の沈子としての用途が古くから指摘されていたが、「特別な意味をこめた護符として壁際に吊り下げ」たのではないかと祭祀に使用されたことを想定された。漁撈具と判断するのではなく、祭祀具としての性格も検討しなければならないであろうと結論づけた。

その他の土玉を扱った論考は、土製模造品・土製品の一部として取り扱うものが多くを占めている。それぞれ、想定される使用方法によって、その扱いは大きく変わる。ここでは、それぞれ想定される使用方法ごとに論考を確認する。

はじめに、祭祀具としての土玉についての論考である。

馬目順一氏は、成田市北須賀より出土した土玉について考察された。成田市北須賀は、南側は印旛沼、北側は水田地に面する標高25mの独立台地上に位置する。台地の中央の桑畑から100個の土玉が出土した。耕作中の出土であり、詳細は不明であるが、伴出遺物はなかった。100個のうち2個を実測し報告。馬目氏は付近に存在する土器から土師器の中でもやや新しい型式に伴うものと想定された。土玉については、祭祀遺跡から出土する例が多いことから祭祀的性格をもつものと考えられる説と土錘とする説を比較し、祭祀的性格を帯びた遺物として理解し、その遺跡も祭祀遺跡とした^(註2)。

小野真一氏は、『祭祀遺跡』^(註3)の中で、土製模造品を取り上げ、玉類について「丸玉」・「管玉」・「棗玉」・「切子玉」に分類している。土玉については、中央に一孔をもち、大きいものは径2cmぐらいであり、「土錘とまちがうことがあるので調査に留意しなければならない」（下線は筆者による）と注意を促してい

る。また、出現する時期としては、沼津市目黒身遺跡では大廓式期（古墳時代前期）の住居跡からの出土例や、熱海市上多賀の宮脇遺跡でも御神木の周囲から同時期の土器と伴出していた例から4世紀代を想定された。「管玉」は、細長い管状のもので長さは3cm前後、外形はごくゆるやかなで中央部の幅がやや大となり、径1cmぐらいになっている。伊豆地方などでは細長い土錘と間違えることがあるが、この種の形態の土錘は年代が下がるようである。埼玉県大里郡岡部町（現深谷市）榛沢遺跡や、神奈川県横須賀市の鉾切遺跡、広島県世羅郡世羅町宇山遺跡などからも出土しているが、全体的に出土例は少ない。「棗玉」は、コハク玉ともいわれるびや樽形の玉を模したもので、最大径は中央部にある。前掲の広島県宇山遺跡や茨城県岩井市（現坂東市）猿ノ子遺跡、埼玉県大里郡岡部町（現深谷市）榛沢遺跡などから出土している。「切子玉」は、水晶製の切子玉を模したもので、千葉県船橋市小室町のB-18号住居址や岩手県岩手郡岩手町沢口遺跡などから出土していると玉類ごとに類例を提示した。

齊藤貴史氏・清水哲氏は、茨城県つくば市島名熊の山遺跡遺跡の土製玉類を分析され、2cm以内をカマドの解体等に伴う祭祀具としての性格を想定された。また2cm以内の土玉は装身具としても使用されたのではないかと推定された。一方、2cmを超える土玉を「錘」と分析された^(註4)。2cm超えの土玉の出土状況から「錘」と判断されているが、「錘」とする根拠が希薄である。そもそも大きさで用途が分かっていたとは思えない。清水氏はさらに、土玉の出土状況を分析され、6世紀中葉に出現し、6世紀後葉と7世紀前葉の2時期に集中し、勾玉は6世紀後葉、管玉・丸玉・小玉は7世紀前葉に最も多くなることを指摘された^(註5)。

次に漁撈具としての土錘についての論考である。千葉県内で土玉について土錘として扱っている論考は、次の論考を看取できる。これらの論考に共通する点としては、出土状況の分析がなく形状からのみで分類している論考が多く、祭祀遺物というよりは漁撈に使用された土錘としての用途を当初から想定されている。

野中徹氏は、土錘を大きく3分類（細かくは5分類）し、土玉（球状土錘）をB類とした。B類の分布は、印旛・手賀沼周辺では大部分を占めるとした。また、B類には大形のものはないとした^(註6)。

岸本雅人氏は、県内出土土錘を8種類に分類した。このうち、土玉（球状土錘）を「有孔で球形を呈す。成形は雑なものが多く、正球形のものは少なく大多数は歪みがちのものである」とした。また、土玉（球状土錘）の分布が印旛手賀沼周辺地域に圧倒的に多く、他の類型を凌駕する物と指摘した^(註7)。

土屋治雄・高梨友子氏は、野中氏・岸本氏の論考を踏まえて、管状土錘に着目し考察された。管状土錘を長さ・幅で8分類した。また、その中で土玉（球状土錘）も加えて考察された。土玉の分布は、千葉・市原以北の地域では主体的に出土し、県南地域では管状土錘が主体的に出土している傾向を考察された。土玉（球状土錘）の使用方法については、漁撈に使用されたのではなく織物の錘として使用されたのではないかと指摘された。漁撈以外の視点も加えて論考している^(註8)。

この3つの論考に共通することは、土玉は、千葉・市原以北に主体的に出土し、特に印旛手賀沼周辺地域において圧倒的に多く出土するということである。また、その用途については、漁撈や織物の錘を想定されており、生業に使用する錘としての用途から離れていない。

次に関東を対象とした土錘としての用途の論考である。種石悠氏は、土玉（球状土錘）について、「現段階では、球状土錘の用途も漁網錘であったと認めたい」と、土玉を積極的に土錘と認定している。また、土玉が竪穴住居跡の炉・カマド内あるいは周辺から出土しているにも関わらず、「火に関わる祭祀行為によるものではなく、住居内の炉やカマドで焼成された土錘が、そのまま残存したと解釈」された。カマド

閉塞に伴うカマド封じの祭祀行為に伴う土玉出土状況等を完全に無視した論考と言える。また、種石氏は、球状土錘の用途について、内陸部からの出土例が極端に少ないことと千葉県柏市戸張一番割遺跡の古墳前期の住居から、数珠状につらなった状態で出土した例をもって、漁網錘とした^(註9)。

津野仁氏は、下野国の生産・交易と地域支配を様々な角度から重層的に古代地域史を描き出していくケーススタディの提示を目的として『古代の生産と地域支配』としてまとめられた。土玉を球状土錘として捉え、漁網利用の漁撈活動を想定された。土錘の出土数は常陸の霞ヶ浦や北浦・洄沼周辺が圧倒的に多く、その一体が漁村と呼ぶべきで、水産物の特産地であったと述べている。土玉の出土状況进行分析しないまま、土玉＝球状土錘＝漁網の錘と規定している。種石氏と同じく、土玉の出土状況を完全に無視した論考と言える^(註10)。

網漁の土錘とする論考は数多く、今回は、千葉県及び茨城県を扱った上記論考のみ記述したが、他の論考も概ね、大型土錘は袋網漁、小型土錘は刺網漁を想定されている。それぞれの論考には土錘の出土状況を記述している論考は非常に少なく、形状から土錘としている点で多いに疑問の残る論考のみである。

次に生産具としての土玉についての論考である。寺村光晴氏は「稲荷峰1号址工作用ピット内出土例から、これが廻転における勢車としてのコマとして使用されたと考えてよい」と考察され、玉作製作の勢車のコマとしての土錘を想定された^(註11)。

以上のように、土玉はその形状のみから使用状況を判断するのは非常に困難な遺物であることがわかる^(註12)。出土状況を丁寧に確認する必要がある。出土状況を確認したうえで、土玉なのか土錘なのかを判断しなければならない。よって、この論考では、出土状況が明瞭な火処（炉・カマド）周辺から出土する事例をとりあげる。また、生業を連想させる「土錘」を使用せず「土玉」と表記することとする。また、土玉の中でも球状の丸玉を扱う。

3 土玉出土事例の検討

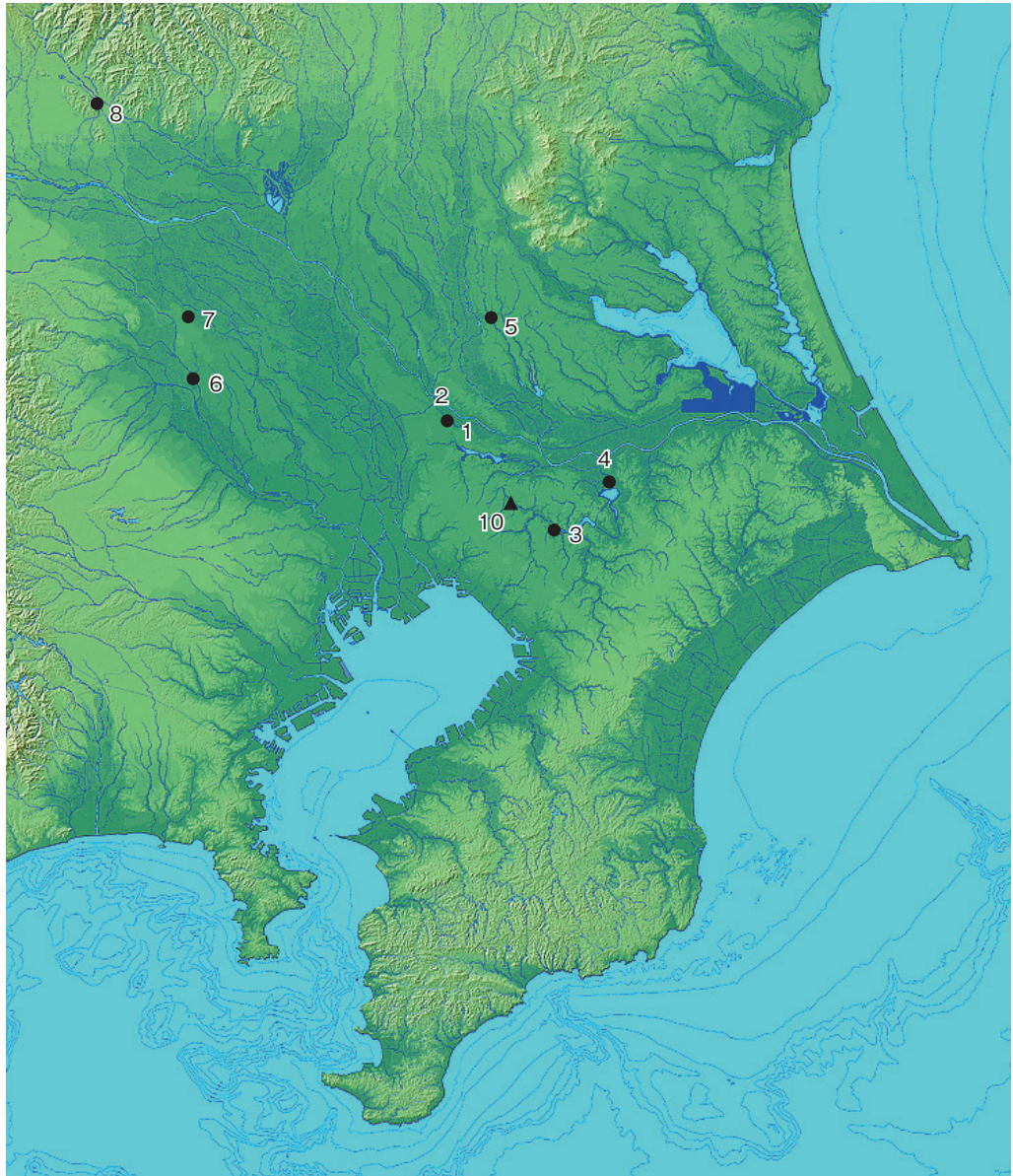
土玉の出土状況のうち、祭祀行為に伴う祭祀具と想定される出土事例を以下列記し、その出土状況を検討する。特に注目するのは、出土状況が明瞭な火処（炉・カマド）周辺からまとまって出土する遺構である。また、土玉とともに共伴する遺物にも着目し、祭祀の実態に迫っていくこととする。対象とする時代は概ね古墳時代を中心とし、遺跡によっては奈良・平安時代も含めて取り扱う。対象とする地域は千葉県を中心とし、関東・九州・朝鮮半島の例も取り扱う（第1図）。

(1) 千葉県出土遺跡

前節でも取り上げたとおり、土玉の分布は千葉・市原以北から多く出土し、特に印旛・手賀沼周辺地域において圧倒的に多く出土するものの炉・カマドを中心とする火処からの事例は意外と少ない。以下、事例について取り上げる。

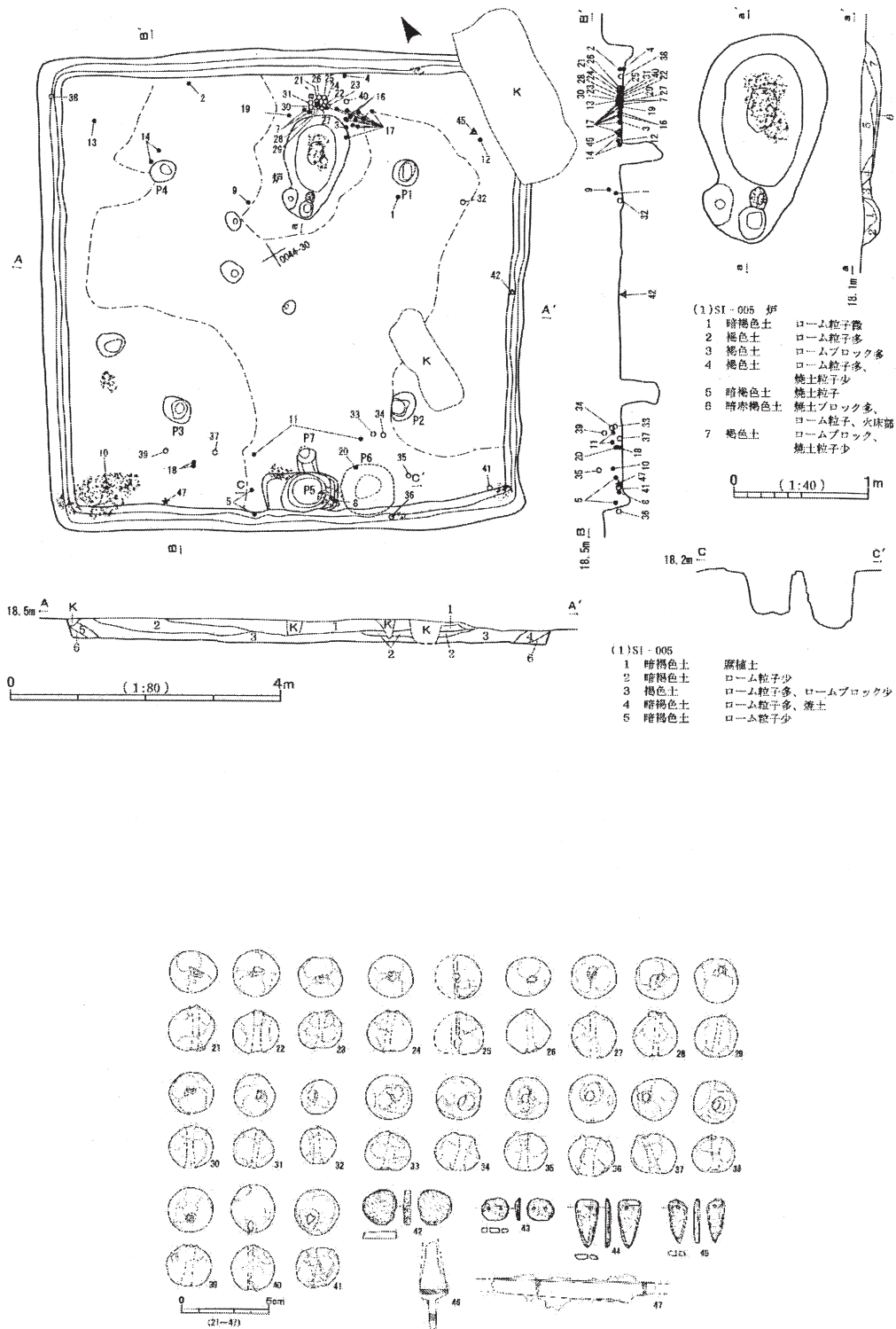
・寺下前遺跡（千葉県柏市 第2図）は、古常陸川南岸の柏・我孫子低地と手賀沼水系の地金堀に挟まれた標高16～18mの台地に立地する。つくばエクスプレス沿線の土地区画整理に伴う発掘調査である。古墳時代中期の竪穴住居跡を2軒検出した^(註13)。

SI005は、古墳時代中期前葉の竪穴住居跡である。住居の主軸径7.32m、直交径7.10m。主柱穴は4本検出されている。貯蔵穴は南西壁中央に位置する。壁周溝は全周する。炉は北東壁近くのP1とP4を結んだ線上より壁寄りに位置している。土玉は21点、このうち12点が炉の周辺にまとまって出土している。



第1図 今回取り上げた遺跡

(国土地理院 (<https://maps.gsi.go.jp/development/ichiran.html>) データを加工)



第2図 寺下前遺跡（千葉県柏市）SI005

土玉は、最大径20.5~26.0mm、最大長20.5~26.0、孔径5.0~14.0mm、重8.0~15.5g。

・**駒形遺跡**（千葉県柏市 第3図）は、寺下前遺跡と同じくつくばエクスプレス沿線の土地区画整理に伴う発掘調査である。古墳時代前期の竪穴住居跡を2軒、古墳時代中期中葉の竪穴住居跡が1軒の計3軒検出した。非常に遺構分布が希薄である^(註14)。

SI103は、古墳時代中期中葉の竪穴住居で、初現的なカマドが検出された。住居の主軸4.79m、直交軸4.85m。主柱穴および出入り口のピットは検出されなかった。カマドは北西壁の北隅寄りに偏して構築している。掛口には底部穿孔された甕が据え置かれていた。土玉は9点、カマド付近を含めた竪穴住居から散在的に出土している。カマド付近からは3点出土している。カマド内からは出土していない。その他の遺物としては烏帽子形土製支脚（炉器台）が3点出土している。烏帽子形土製支脚の周りから6点出土しており、付近に炉跡が存在する可能性もある。いずれも火処に伴って出土している。土玉は、最大径21.0~28.5mm、最大長21.0~28.5mm、孔径2.0~11.0mm、重量8.6~22.0g。

・**岩戸広台遺跡**（千葉県印旛郡印旛村（現印西市） 第4図）は、印旛沼の西端近くに流入する小支谷に東面する標高27mの舌状台地上に位置する^(註15)。A地区とB地区に分かれて調査され、A地区は7世紀後半から9世紀末まで連続する。B地区は6世紀前葉から9世紀後葉の竪穴住居跡を検出しているが、7世紀後半~9世紀中頃までではなく、連続していない。

B地区の003号住居跡は6世紀末葉の竪穴住居跡である。住居の主軸径5.70m、直交径5.60m。主柱穴は4。その他に出入り口ピットあり。周溝は東側コーナー部分を除き全周する。カマドは北西壁の中央よりやや右側に位置する。カマド内左袖寄りの火床部前寄りから土玉13点密集して出土した。土玉は、最大径25.0~29.0mm、最大長23.0~31.0mm、孔径4.0~6.0mm、重量不明。

・**酒直遺跡**（千葉県印旛郡栄町 第5図）は、白鳳期の古代寺院である龍角寺の西側、古墳時代後期の龍角寺古墳群の西側に位置する^(註16)。酒直遺跡からは弥生時代の竪穴住居跡2軒、古墳時代前期~奈良・平安時代にかけての竪穴住居跡が69軒検出された。

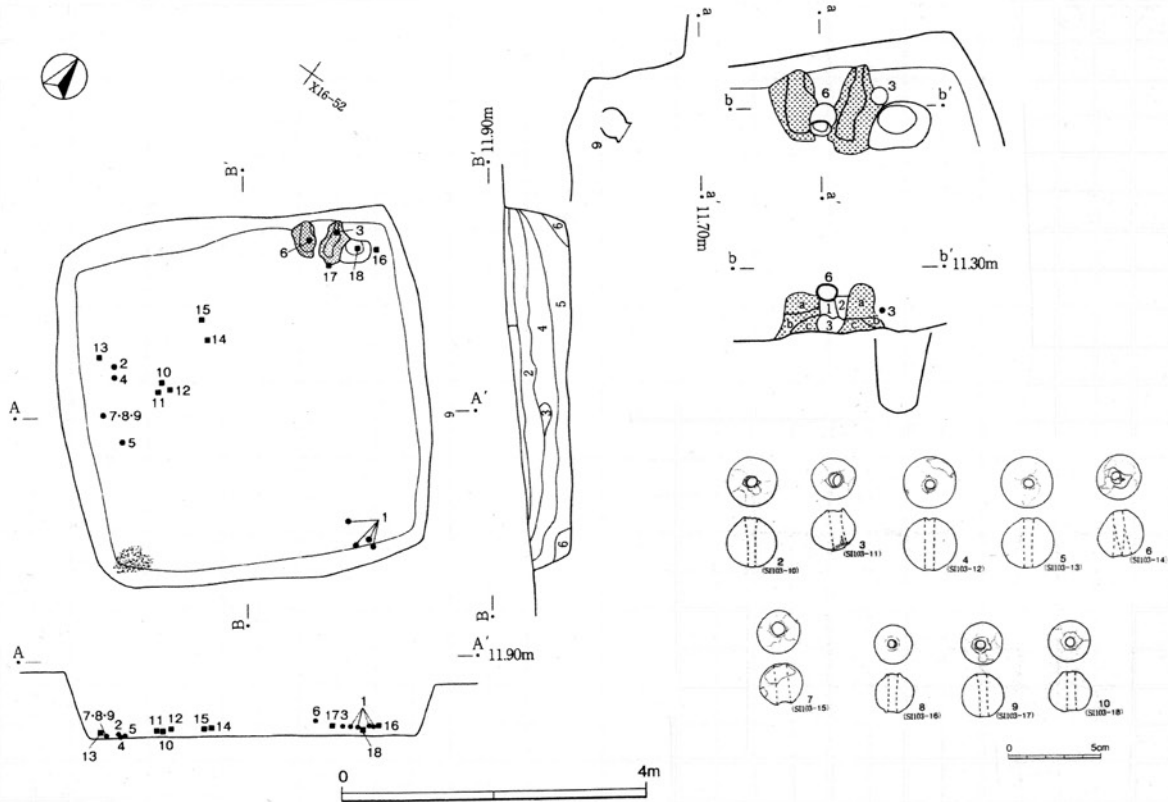
063号住居址は、7世紀代の竪穴住居跡である。住居の主軸径5.85m、直交径6.00m。主柱穴は4。その他出入り口ピット、貯蔵穴は検出されていない。周溝は全周する。カマドは北西壁の中央よりやや北寄りに位置する。土玉はカマドとP4付近に集中して出土した。とくにカマドからは大量に出土しており、調査者は紐などを通してひとまとめにした状態を想定された。土玉は、カマドの前面を壊したカマド封じの後に、左袖際に集中して出土した。土玉は、最大径16.0~26.0mm、最大長10.0~28.0mm、孔径5.0mm前後、重量不明。

（2）関東出土遺跡

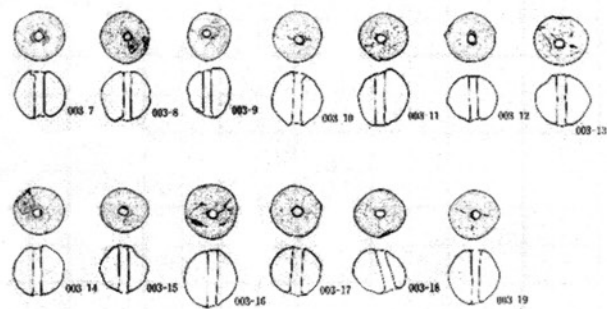
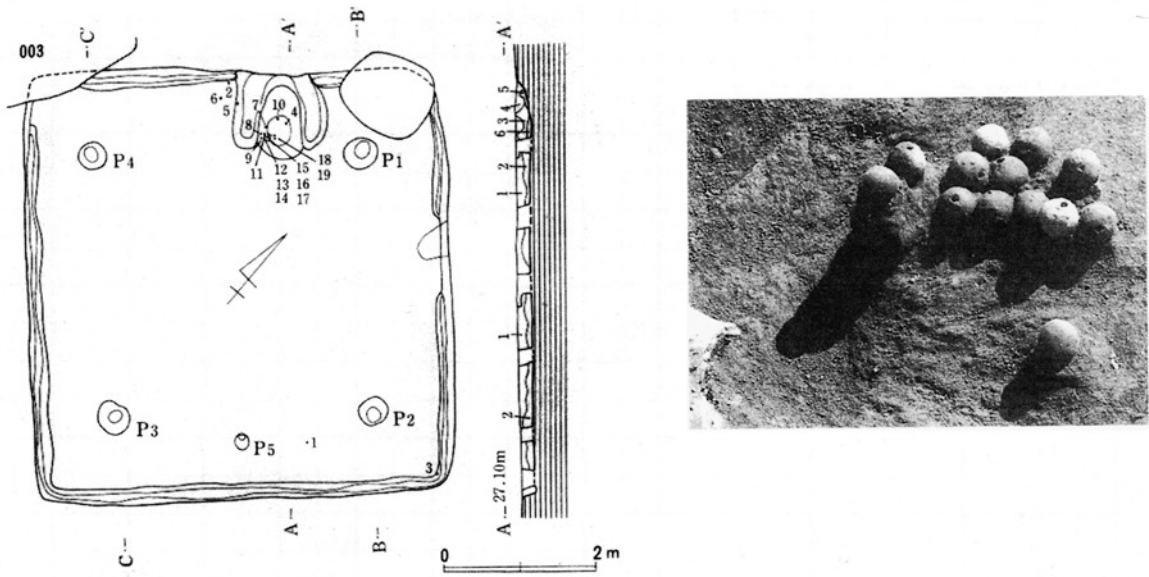
『茨城県』^(註17)

・**島名熊の山遺跡**（茨城県つくば市 第6図）は、筑波山の南西側に広がる標高約13~22mの台地上に位置する^(註18)。つくばエクスプレス沿線の土地区画整理に伴う発掘調査である。古墳時代前期から奈良・平安時代にかけての竪穴住居跡が1,900軒以上検出された。時期別に見ると、6世紀後葉から7世紀前葉に集落のピークがくる。律令期には河内郡嶋名郷との関連が指摘されている遺跡である。

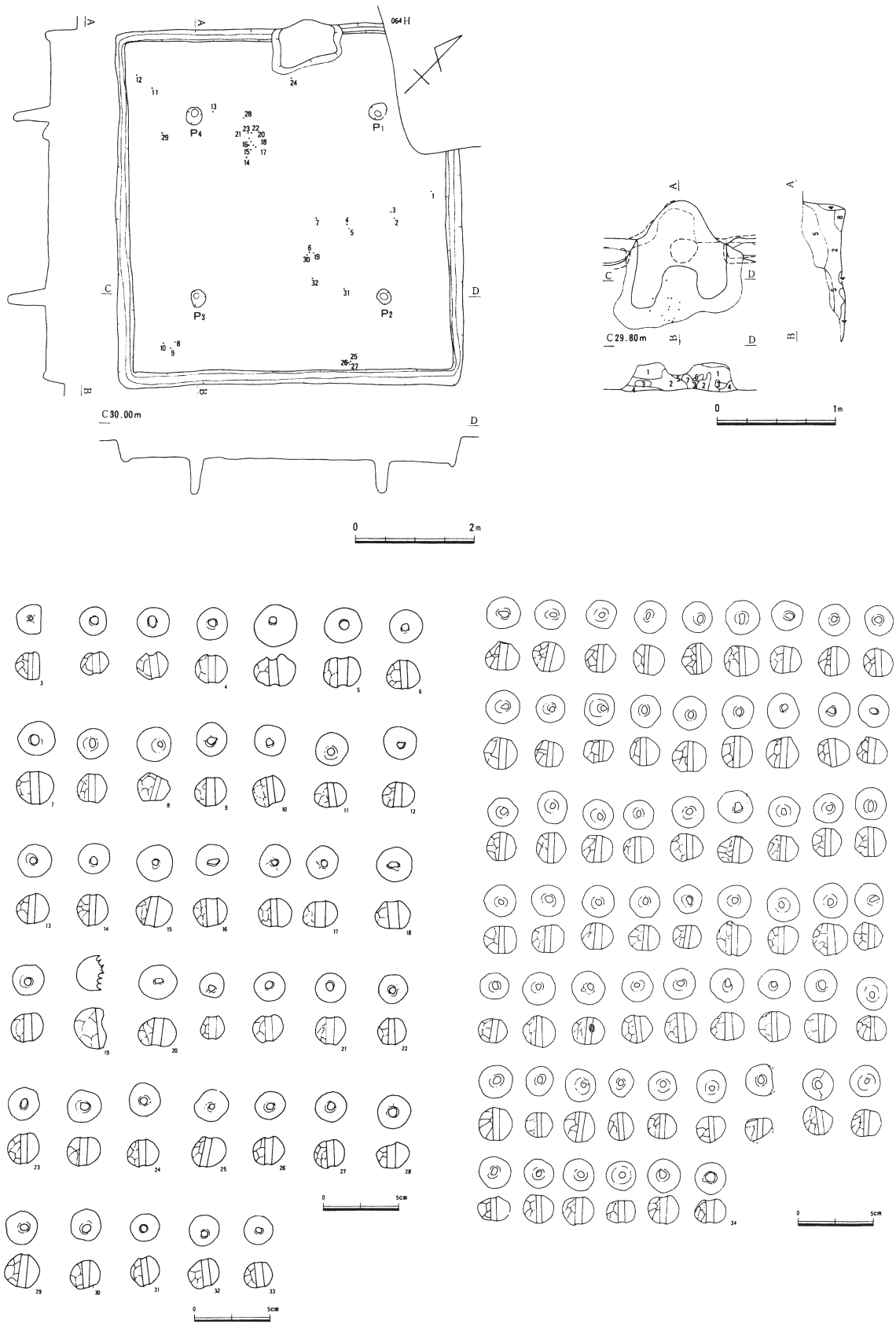
第2572号住居跡は、主軸径5.13m、直交径4.10mの平面長方形を呈する。主柱穴は1。南側に出入り口ピットと貯蔵穴が位置する。壁周溝はない。カマドは北壁の東側に寄って構築している。カマド右袖脇の壁寄りに土玉、勾玉形、鏡形が集中して出土。カマド内には鋤先形土製品、左袖脇に土玉、土製勾玉が散



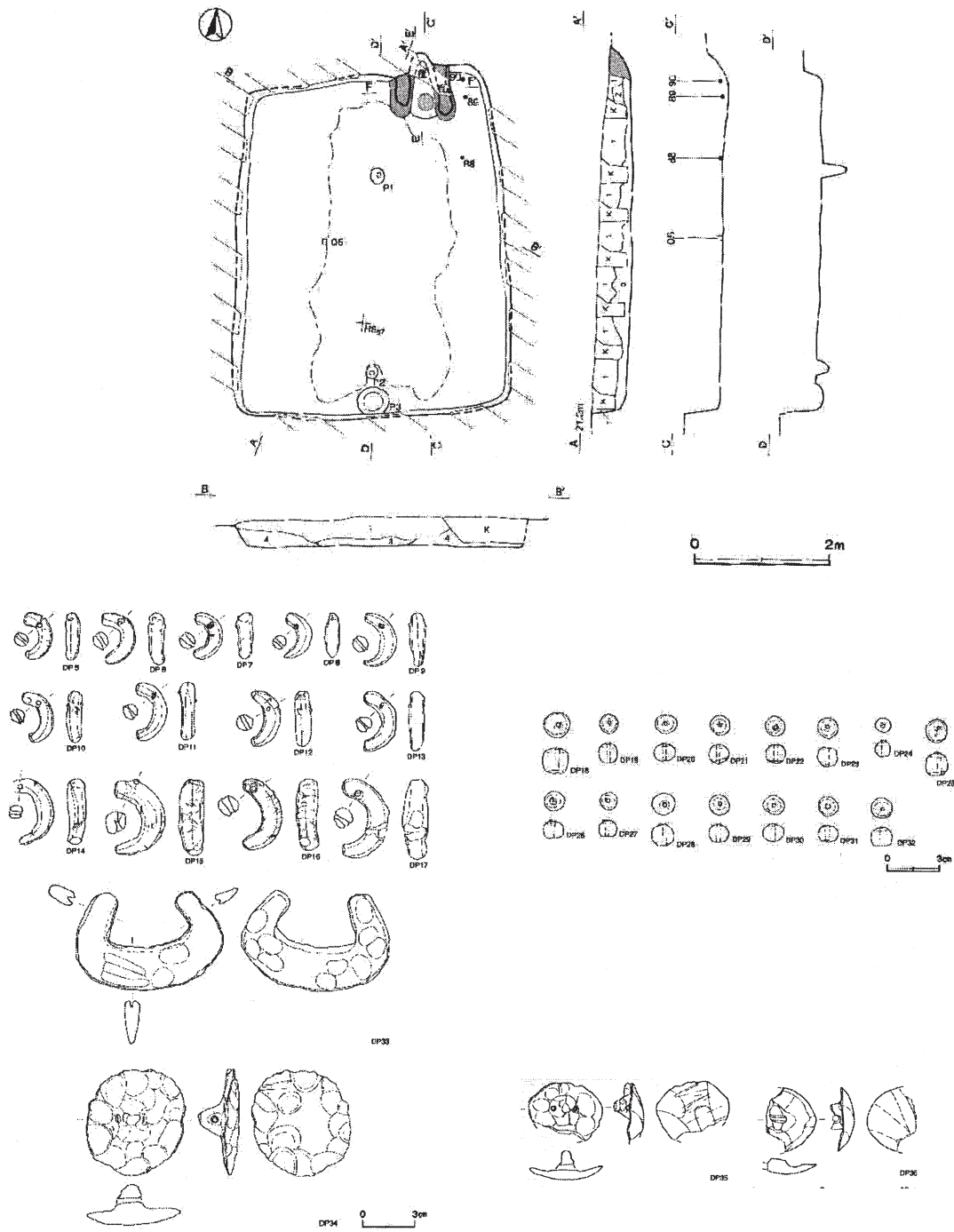
第3図 駒形遺跡 (千葉県柏市) SI103



第4図 岩戸広台遺跡 (千葉県印西市) B地区003号住居跡



第5図 酒直遺跡（千葉県印旛郡栄町）063号住居址



第6図 島名熊の山遺跡（茨城県つくば市）第2572号住居跡

在していた。土製模造品のみを利用したカマド祭祀が想定される。土玉は、最大径9.0~15.0mm、最大高9.0~16.0mm、孔径2.0~3.0mm、重量0.6~3.1gと小型である。

島名熊の山遺跡では、第2572号住居跡の他にも、カマド祭祀に土玉を使用する例が14例認められる。そのうち第2572号住居跡のように鋤先形土製品が伴う住居跡は、第510号・第1596号・第2569号の3住居跡である。関連する遺跡としては、千葉県我孫子市日秀西遺跡がある。7世紀中葉頃の029A、032C、041Bの竪穴建物から鋤先形土製品が出土している。特に041Bでは8点がまとまって出土している。

『埼玉県』

・**楽中遺跡**（埼玉県桶川市川田谷字楽中 第7図）は、大宮台地上に立地し、荒川の支流である江川の氾濫原低湿地に接している。旧石器時代から中近世までの複合遺跡である。古墳時代の遺構は、竪穴住居跡12軒、古墳跡1基、溝跡1条、土壙2基が検出された。竪穴住居跡は前期が11軒、後期が1軒である^(註19)。

後期の第5号住居跡カマド内から土玉が31点出土した。カマド左袖脇南側からは灰白色粘土塊を検出しているが、報告者は、カマド構築材、もしくは土玉の原料ではないかと指摘している。土玉は、最大径19.0~27.0mm、最大長15.0~24.0mm、孔径4.0~9.0mm、重量4.9~11.1g。

住居跡からは他に須恵器高杯や土師器壺・ミニチュア土器が出土しているが、いずれも破片であり、時代を特定できる遺物は出土していない。調査区内で調査された古墳跡（樋詰6号墳）からは刀装具である環付足金物の形態から豊島編年の短脚C類に分類され、7世紀第2四半期に比定される。住居跡は古墳に先行するものと想定される。

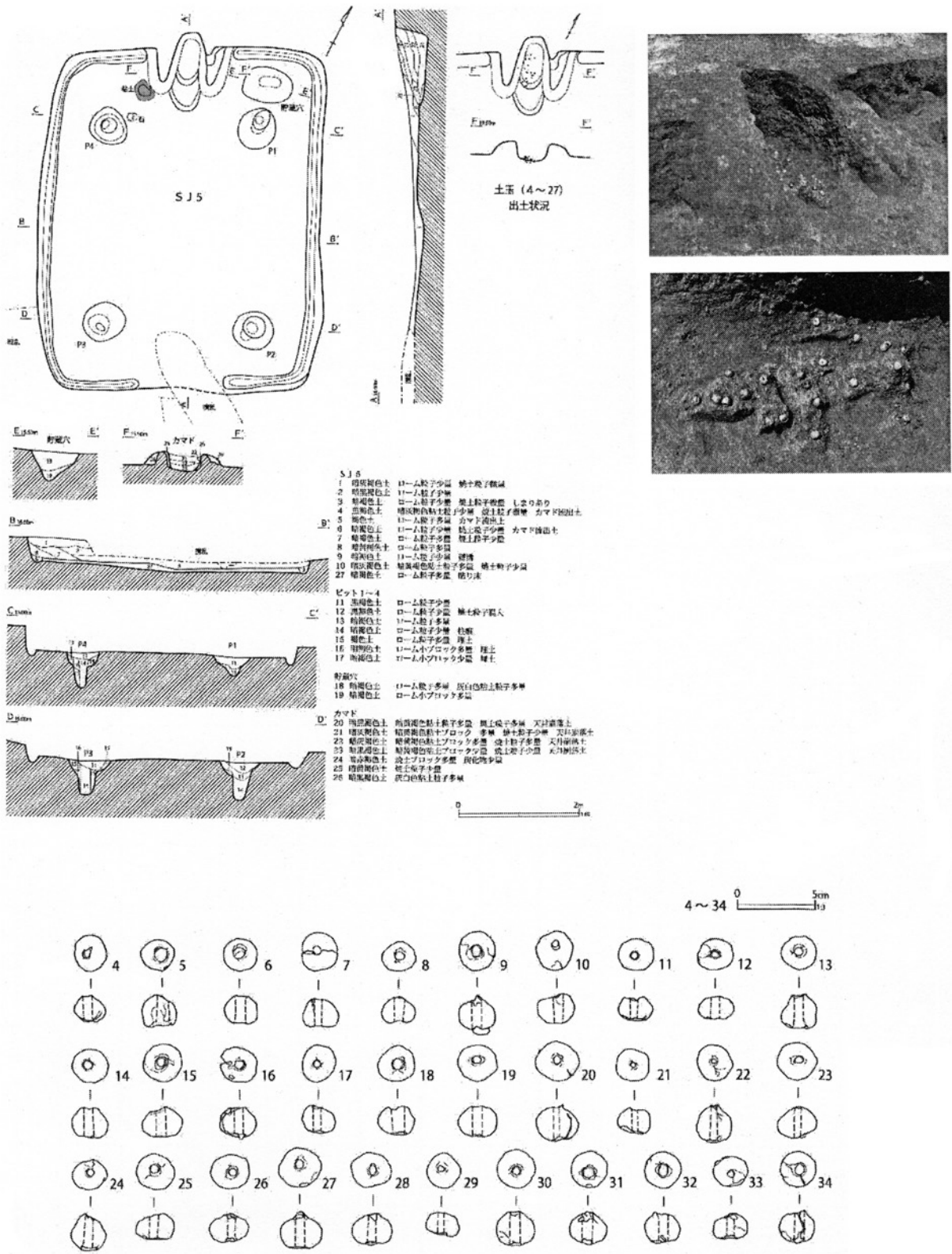
・**中三谷遺跡**（埼玉県鴻巣市大字鴻巣中三谷 第8図）は、元荒川の右岸の沖積低地に位置し、標高20m前後を測る^(註20)。古墳時代から奈良・平安時代の竪穴住居跡46軒、掘立柱建物跡2棟、溝1条。このうち、古墳時代の竪穴住居跡は、五領期6軒、和泉期5軒、鬼高期29軒、国分期4軒、時期不明2軒となっている。石製模造品が2軒から出土している。

第21号住居跡は、主軸径6.35m、直交径6.35m、深さ0.3m。主軸方位S-36°-W。カマドは南壁の中央からやや東に寄った位置にある。煙道は壁外に1.1m延びる。主柱穴は4。貯蔵穴はカマドの左側に位置する。壁周溝はカマドを除いて全周する。また北壁近い場所に炉跡のような焼土の散布が認められた。カマド焚き口部には台付甕が口縁部を下にして据えられている。その上に甕が重なる。燃焼部先端の灰層上面から土玉が16個、ネックレス状に連結した状態で検出された。調査者はカマド内で焼成したか一連の土玉を土師器杯とともにカマドに供えたのではないかと想定している。筆者はカマド封じに伴う行為と捉える。土玉は、最大径22.0~29.0mm、最大長23.0~31.0mm、孔径5mm前後、重量4.7~13.8g。

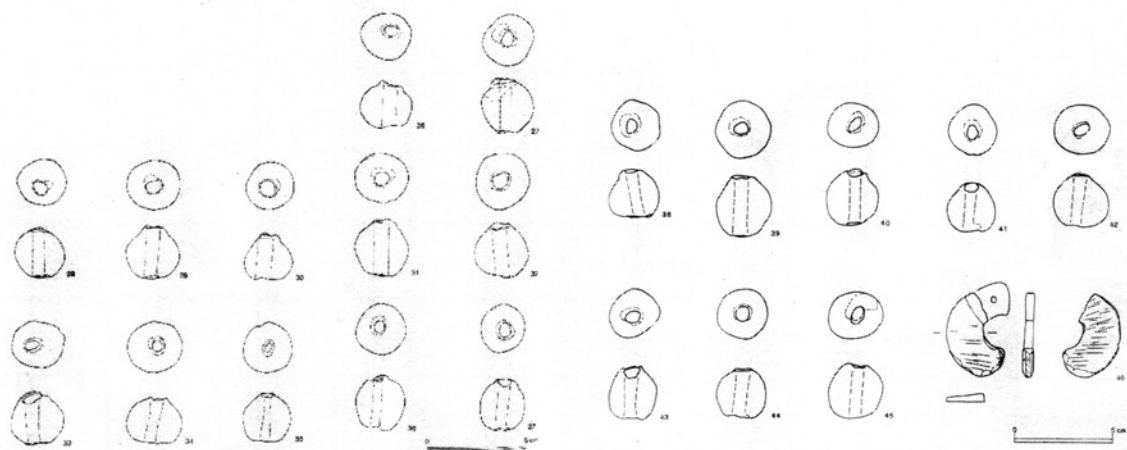
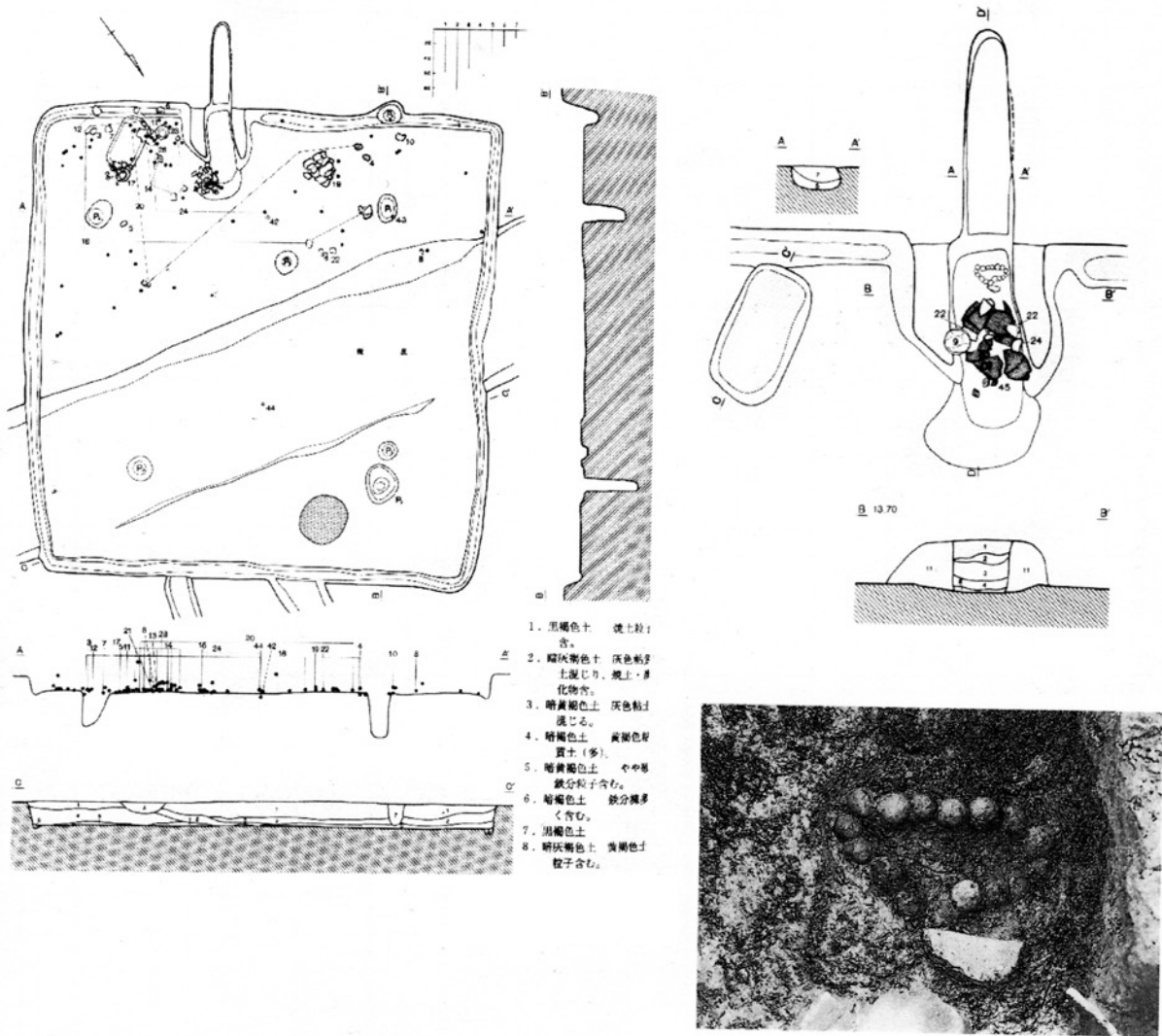
『群馬県』

・**反丸遺跡**（群馬県太田市吉沢町 第9図）は、渡良瀬川扇状地の旧河川によって形成された微高地上に大規模な集落が営まれていた^(註21)。集落は、4世紀~6世紀の古墳時代に限定され、450軒以上の竪穴住居跡を検出している。土玉は合計207点出土した。時期的には、6世紀第2四半期から第3四半期に多く出土している。このうちカマド祭祀に関連する竪穴住居の内、土玉がカマド内から出土する遺構を取り上げる。

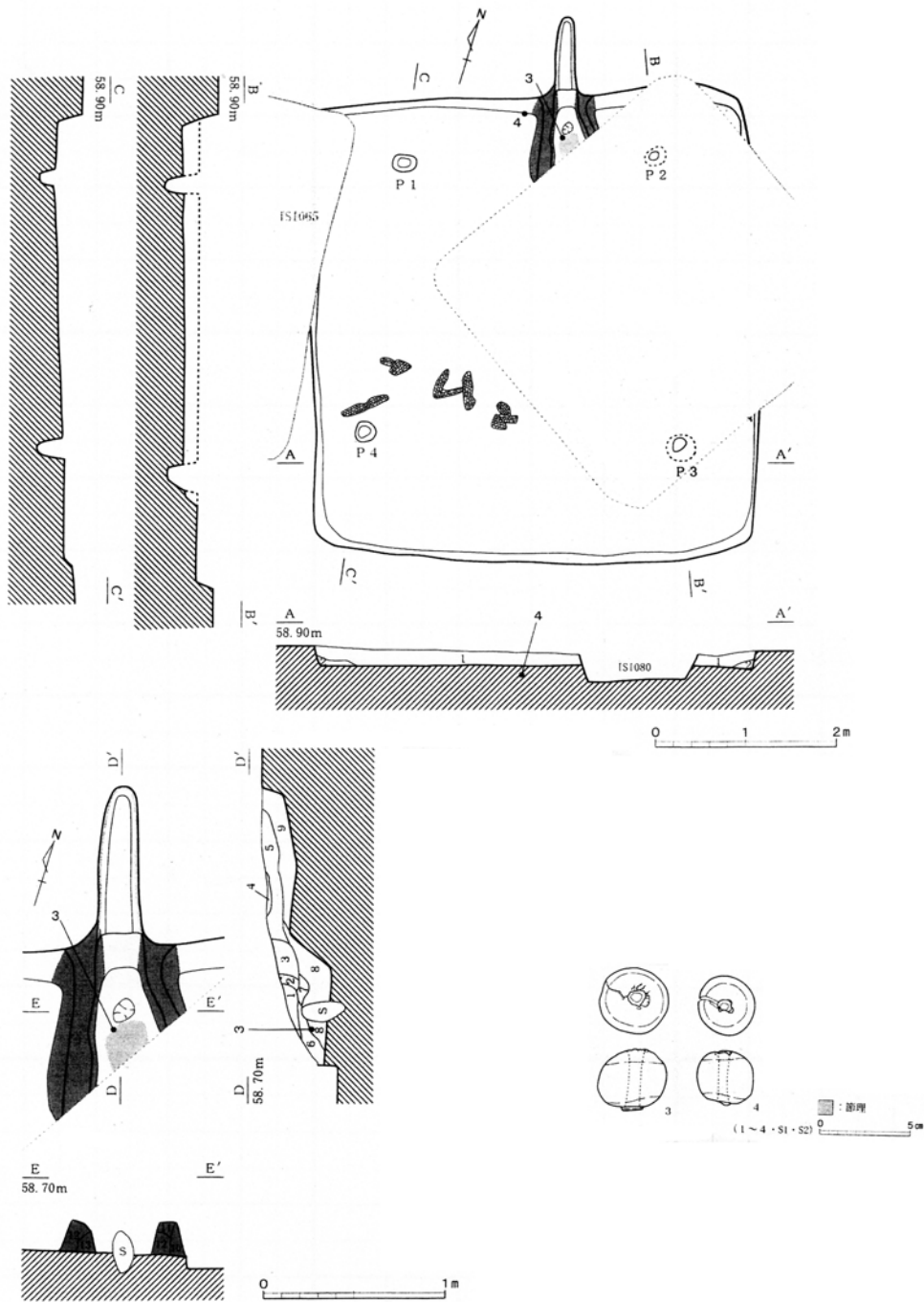
I区S I 064は、主軸径5.29m、直交径4.97m、深さ0.20m。主軸方位N-17°-W。カマドは北壁の中央やや東に寄った位置にある。主柱穴は4。貯蔵穴及び出入り口ピットは検出されていない。壁周溝は検出されなかった。カマド全面はS I 080に壊される。燃焼部では支脚として使用されたと考えられる礫が



第7図 楽中遺跡(埼玉県桶川市)第5号住居跡



第8図 中三谷遺跡(埼玉県鴻巣市)第21号住居跡



第9図 反丸遺跡（群馬県太田市）I区 SI064

出土している。土玉はカマド中央部の燃焼部と左袖の壁際掘り方内より出土している。最大径33.0～38.0mm、最大長30.0～34.0mm、孔径4～6mm、重量24.78～38.19g。

反丸遺跡では、カマド祭祀に土玉を使用する例が7例認められる。カマドを付設する竪穴住居跡のカマド内及び周辺からは、土製模造品を使用した祭祀が認められる。祭祀に用いた土製模造品は、土製勾玉、土製模造鏡、土玉、土鈴である。I区SI397はカマド内から土製模造鏡が出土している。

(3) 関東以外出土遺跡

『福岡県』

・松木遺跡（福岡県筑紫郡那珂川町（現那珂川市）第10図）は、梶原川の左岸、標高26m前後の河岸段丘上に位置する^(註22)。区画整理事業に伴う発掘調査である。

150街区6号住居跡は、主軸径5.30m、直交径5.20m。主柱穴は4。西壁の中央に「U」字状のカマドを付設している。カマドの内側に自然石を利用した支脚が灰と炭化物の混合土中に立てられ、その上に黄褐色土で覆う。支脚上には甕の破片を敷きその上に土師器碗を載せている。碗内外には祭事に伴う被熱痕跡が認められる。その上に、土製模造鏡2、土製勾玉1、土玉1、雫形土製品1、手捏土器4が整然と置かれていた。土玉を含む土製品と手捏土器は被熱の痕跡が認められず、カマド閉塞に伴う祭事後に土製品を並べ置いたものと想定される。土玉は断面台形を呈し、最大径18.0mm、最大長15.0mm。カマド祭祀を考える上で極めて重要な事例である。時期は5世紀第2四半期である。

他に5世紀前葉の140街区6号住居跡のカマド内に石に据えられた土師器高杯が伏せて納置されていた。焼土内から土製勾玉が出土している。

松木遺跡のカマド祭祀を考察された佐々木隆彦氏は、報告書中に北部九州のカマド祭祀をまとめられた。それによると、福岡県山門郡瀬高町（現みやま市）大道端遺跡C区40号住居跡カマド内に土玉1納置していた事例が認められる^(註23)。

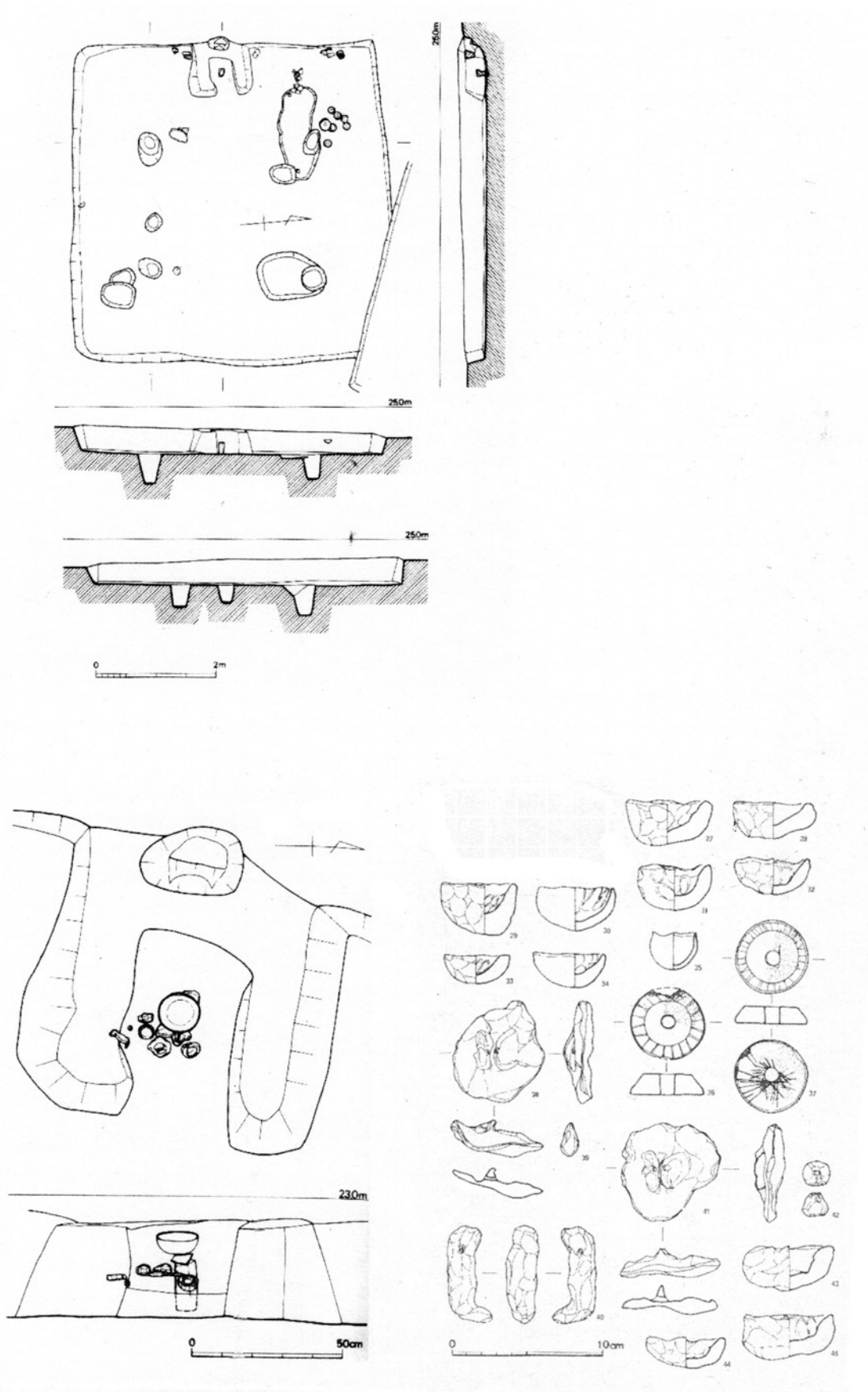
(4) 朝鮮半島出土遺跡

金海府院洞遺跡では明瞭に土玉がカマドから出土しているわけではないが、祭祀遺物に共通点があることから、ここに取り上げる。府院洞遺跡C地区2号住居跡は、平面楕円形で、竪穴の深さは0.5mを測る。西壁にカマドが造り付けられている。カマドは竪穴建物の床面を若干掘りくぼめ、石を心材として構築していた。煙道は認められない。府院洞遺跡では、土師器及び土師系土器が出土している。布留式土器で、4世紀代である。土器以外ではミニチュア土器、舟・勾玉・丸玉などの土製模造品、石製模造品（有孔円板）や管玉などの玉類も出土した。カマドに近いところからト骨も出土している^(註24)。古代のカマド信仰をまとめられた柳沼千枝氏は、カマドの故地である中国・朝鮮半島では、カマドは神聖なものであり、祭りの対象とされた。朝鮮半島では、カマドの祭りに土玉や土製勾玉を使用しており、その事例として本事例をとりあげている^(註25)。また、柳沼氏は、カマドの伝来とともに土玉や土製勾玉を使用する祭りも伝来したものと想定された。

4 土玉使用祭祀について

前節において、土玉使用について、特に炉・カマド周辺から土玉が出土した事例を考察した。祭祀遺跡での土玉の使用についても認められているが、今回、竪穴住居跡に行う祭祀のみを対象とする。

では、土玉を使用した祭祀行為はどのようなものが想定されるであろうか。まずは、建物に対する祭祀



第10図 松木遺跡（福岡県那珂川市）150街地 6号住居跡

と火処に対する祭祀が想定されよう。それぞれ構築時・使用時・廃棄時の3時期に分けることができる。

I類：建物祭祀。建物に関わる祭祀。構築時、使用時、廃棄時の3時期における祭祀に土玉を使用する。

A構築時（住居床面掘方内に土玉を納置する。地鎮的な使用を想定。）

B使用時（竪穴住居にて生活中であり、火災などの不慮の事故によらないかぎり使用状況を確認することは極めて困難な事例であるが、平時の使用を想定。）

C廃棄時（住居廃絶後に家仕舞いに伴う祭祀を想定。廃棄の時期によって、さらに2つの時期が想定される。）

ア廃棄直後（住居廃棄の家仕舞いに伴うものを想定。）

イ廃棄から時間が経過（祭祀遺構からの祭祀行為終了後の片付けも想定され、直接は、建物祭祀に伴わない場合もありうる。住居に伴うかどうかの分別は難しい。出入り口ピット周辺あるいはコーナー部分壁際からの出土する事例が散見される。）

II類：火処祭祀。火処（炉・カマド）における祭祀。構築時、使用時、廃棄時の3時期における祭祀に土玉を使用する。

A構築時（カマド構築土内あるいは掘方に土玉を納置する。地鎮的な使用を想定。）

B使用時（竪穴住居にて生活中であり、火災などの不慮の事故によらないかぎり使用状況を確認することは極めて困難な事例であるが、平時の使用を想定。）

C廃棄時（カマド閉塞に伴う祭祀において、祭具としての使用を想定。）

以上の使用状況を想定できるが、調査において検出されるのは、構築時及び廃棄時である。

今回検討した土玉祭祀の事例を上記の分類にあてはめてみよう。いずれも火処より出土する土玉を対象としており、基本的にはII類となる。その中でもII類C廃棄時に該当する。火処祭祀に伴う事例について、出土状況から祭祀行為に伴う使用が確認出来る。

II類以外のその他の事例については、上記に記載の通りであるが、今回は、火処のみの検討としていることから別稿にて検討したい。

火処祭祀に関しては、カマドへの祭祀行為について、次の2つの論考がある。

寺沢知子氏は、カマドへの祭祀行為を分類され、カマドへの祭祀行為を即カマド神への祭祀としてとらえる点に問題があり、北部九州において5世紀初頭に定着したカマドへの祭祀的行為は、住居廃棄に伴う一連の行為として機能したと論じている^(註26)。

また久松哉須子氏は、カマドをめぐる祭祀について論考され、竪穴住居跡から出土する祭祀遺物の出土状況を検討し、祭祀遺物の中でも手捏土器がカマド周辺に集中しており、カマドが導入された当初よりカマドをめぐる信仰が存在していたと想定された^(註27)。

両氏ともに土玉への言及はないものの、カマドへの祭祀行為はカマド導入当初から認められている。このことは、カマドという火処施設とともにカマド信仰も移入され、在地化していったものと想定される。寺沢氏はカマドへの祭祀的行為を住居廃棄に伴う一連の行為としている。カマドを閉塞し、引っ越し先のカマドに新たにカマド神を迎える行為こそ一連の行為となるものと筆者は考えることから、カマド閉塞と住居廃棄とは分けて考える必要があるものと考えている。

次に土玉以外の土製模造品の玉類についてみてみよう。土玉以外の土製模造品の玉類には、視覚的に認

識されやすい勾玉について多く論考されている。その中でも、瀬音大氏は原始・古代の勾玉を研究する中で、土製勾玉について全国的に集成を行い分析された^(註28)。その成果をもとに、土製勾玉の状況を見てみよう。土製勾玉は関東地方においては、弥生時代中期から見られるが、弥生時代と続く古墳時代を通して、竪穴住居跡から多く出土している。また、竪穴住居跡内の出土場所に着目してみると、関東地方は弥生時代中期から炉跡（炉および周辺）からの出土が見られ、弥生時代後期、古墳時代前期、後期、終末期、奈良・平安時代と古墳時代中期を除いて炉跡及びカマドを中心とした特定の場所での出土が確認できる。土玉も土製勾玉と同様に火処からの出土及び出入り口周辺のコーナー部分から多く出土する傾向が指摘できる^(註29)。

土玉は土製勾玉の他に鋤先形土製模造品とも伴出することが、茨城県島名熊の山遺跡事例からも判明している。鋤先形土製模造品については、『播磨國風土記』^(註30)に荒ぶる神を佐比（鋤）によって鎮めた記述が思い起こされる。荒ぶる神を鎮めるために、神の好むモノを納めたのである。各地域において祭具の組成を考える上で重要なヒントとなるであろう。

5 土玉納置について

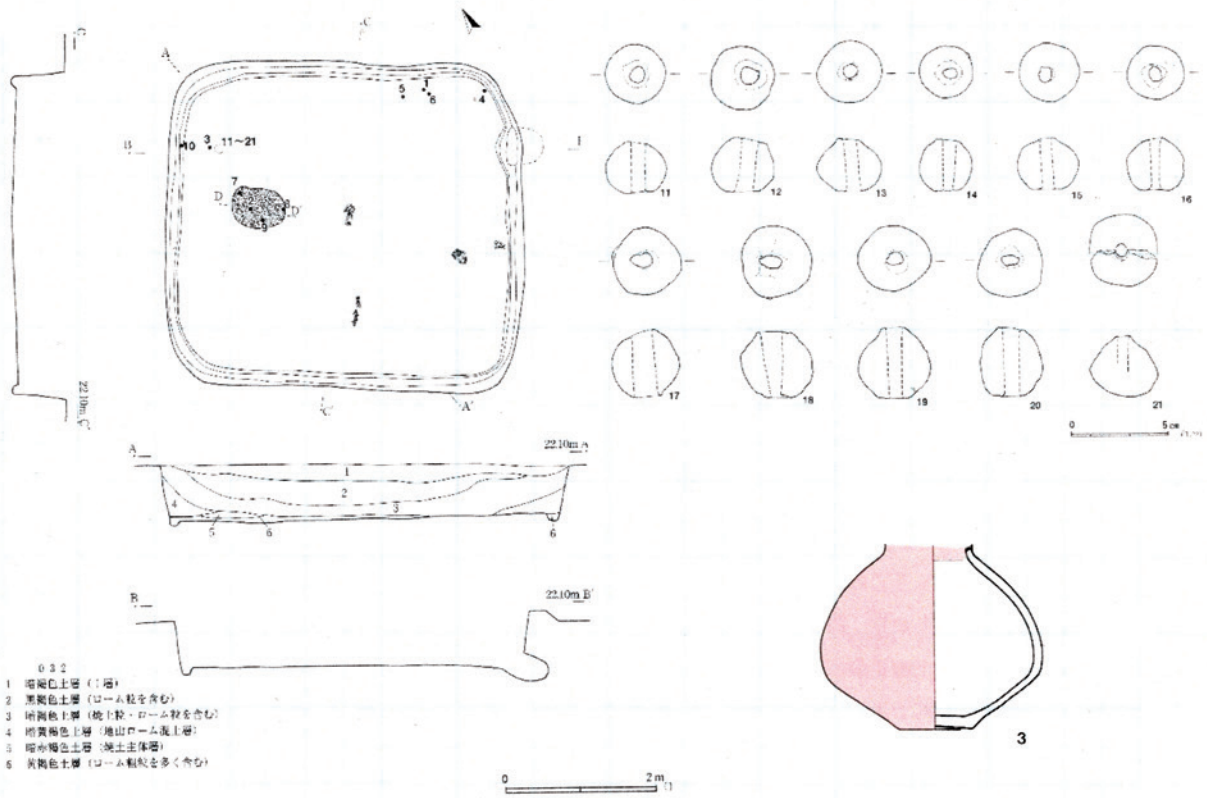
これまで火処から出土する土玉を中心として考察してきた。では、土玉はどのように納められ、保管されていたのであろうか。土玉は神様への供え物であるから、何らかの容器に容れられて祭祀に使用されたものと考えられる。また保管、納置にあたっては容器の使用が想定される。その事例について、次に見てみよう。

土師器壺に容れられていた例としては、千葉県白井市一本桜南遺跡^(註31)（第11図）がある。一本桜南遺跡は、古墳時代前期の竪穴住居跡が60軒検出している。032号住居跡からは、赤彩された小型壺（頸部打ち欠き）内に11個の土玉が納められていた。土玉は、最大径27.0～38.0mm、最大長26.0～36.0mm、孔径6.0～12.0mm、重量19.0～44.7gと大きめである。

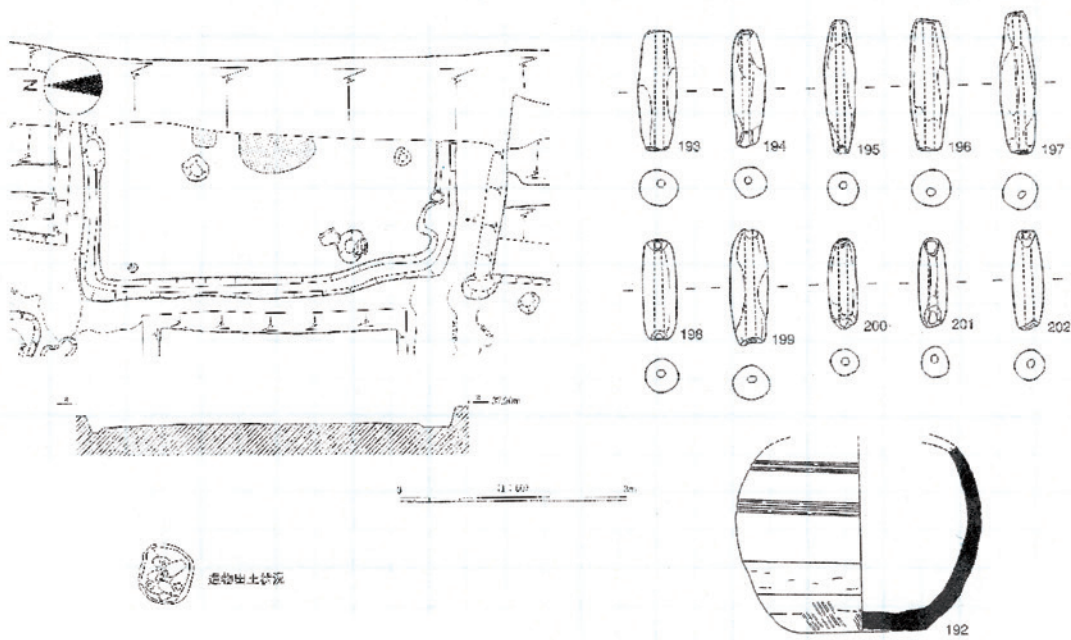
他に細竹管による刺突文様を施した土玉が複数出土している。また、041号住居跡からは砂鉄を納めた赤彩壺を検出している。千葉県内の製鉄関連資料としては最古級の事例である。

須恵器長頸瓶に容れられた例としては、石川県石川郡野々市町（現野々市市）末松A遺跡^(註32)（第12図）がある。末松A遺跡は、標高35～42mの扇状地扇央部に立地している。調査区内においては、7世紀後葉から8世紀前半代の竪穴住居跡を中心とした集落から、その後、掘立柱建物跡を中心とした集落へと変換している。そのうち86SI07は、北陸編年Ⅱ-2期（7世紀第4四半期）の竪穴住居跡である。須恵器長頸瓶（頸部打ち欠き）内に10個の土玉（管玉）が納められていた。土玉（管玉）は、最大径15.0～21.0mm、最大長47.0～76.0mm、孔径3.0～5.0mm、重量10.7～26.8g。

玉を壺に納めた事例について、乙益重隆氏は、弥生・古墳時代の玉を埋納した壺を集成された^(註33)。このうち土玉が出土したのは、大阪府豊中市利倉西遺跡の古墳時代後期の埋甕である。この須恵器甕は底部が穿孔され、勾玉3個、管玉3個、白玉1個、その他の玉5個を納めていた。その他の玉の中には土玉も含まれている。甕は口縁部を打ち欠き、他の須恵器片で蓋とした。乙益氏は、土中に物を埋める祭祀について、中国の『礼記』にある皇帝の封禪の儀に着目し、地を祭るには玉を地中に埋め、川を祭るには璧（環状の扁平な玉）を川に沈めたという故事を引用されている。火処祭祀に関連しないものの祭祀具としての土玉使用の例として記しておく。



第11図 一本桜南遺跡 (千葉県白井市) 032号住居跡



第12図 末松A遺跡 (石川県野々市市) 86 SI07

このように、土玉を納めた土製容器については、事例が少ないものの、頸を打ち欠いた壺に収めていたことが共通している点を指摘しておきたい。

壺以外の例としては、山梨県富士川口町金山遺跡（R2.5.21～10.21調査）から、直径30mm前後の土玉65個を納めた埋納遺構1基が検出されている。土玉を布製袋などに納めたものと想定される^(註34)。

その他の容器として、須恵器・土師器の杯、有機質の筥や籠を想定できるであろう。須恵器・土師器の杯については、『常陸國風土記』^(註35)に、那賀郡の晡時伏山についての記述の中に神の子である蛇を育てる器について「浄き杯に盛りて」、「壇を設けて安置きし」神をまつる場所に壇を設けて、杯に安置している状況を想定できる。土玉の保管というよりは、祭祀状態を表しているといえよう。筥については、篠原浩恵氏により、筥形土製品が所謂供物形土製品と伴出することから神饌具としての用途を考えられた^(註36)。以上のような容器の使用は、土玉使用祭祀のⅡ類B使用時での使用が想定される。

火処祭祀ではなく、地鎮に伴う祭祀具として土玉（管玉）を折敷に納めた例もある。京都府向日市長岡京跡左京第486次調査では、二条条間大路南側溝から条坊側溝を埋める際に行われた祭祀遺構（SX48619）を検出した。この祭祀遺構は、折敷内に須恵器杯、土師器杯・椀と銅鈴1個と土玉（管玉）16個を納めていた。土器は2枚一組で四組、土玉は2個、7個、7個と分かれて出土している。調査時の所見によると繋いでいたような紐などは観察されていない。折敷が水平に置かれていたことや折敷内の埋土が周囲の埋土と同様であり、埋められた跡に移動したとは考えにくいことから、条坊を埋め戻す際に行われた祭祀行為に伴うものと結論づけられた^(註37)。

6 おわりに

この論考は、令和4年度出土遺物公開事業に関わり、展示構成を考える中で、炉やカマドから土玉が出土することから、火処に関する祭祀を想定したことに端を発する。筆者もかつて土玉を形状から土錘と認識していたこともあったが、土玉を土錘と一括りに取り扱うことは、そもそも土玉出土状況を見逃していることに気づかされた。形状は同じであっても、出土状況を細かく観察することが重要である。球状であるからといって土錘と一括りにするのは根拠に欠けると言わざるを得ない。ただし、漁網錘としての使用についても、筆者は否定するものではない^(註38)。

当初は、土玉が出土する県内遺跡の悉皆調査から、火処あるいは家仕舞いに関する祭祀行為を明らかにしたいと考えていたが、筆者の力量が足りず、火処数例のみの紹介に終始してしまった感は否めない。

火処のみとはいっても、管見に及び範囲であり、他にも多くの類例があるかもしれないが、土玉の祭祀具としての使用を想定することができた。

火処における土玉の使用は、管見に及ぶ範囲においては、千葉県北部から茨城県南部を中心として広く分布している。この地域は、香取の海・筑波山を中心として結ばれた地域である。常総型甕が広く分布しており、石枕という特殊な葬具を使用した葬送儀礼など密接に関連した地域である。土玉を使用した祭祀を共有したであろうことは想像に難くない。

今回は土玉でも丸玉を主に検討したが、管玉や棗玉、切子玉といった他の土玉も検討することが今後の課題となる。棗玉については、谷口榮氏が東京低地とその上流部である埼玉西部を対象として「土錘」（谷口氏の見解）をまとめられた^(註39)。その中で棗玉をⅡ類とし、古墳時代後期に盛行し、出現は中期に遡る可能性を指摘された。分布を見ると東京低地と東京湾西岸部にまとまっていると分析された。なお、土玉（丸

玉)をⅣ類とし、古墳時代前期から出現し、後期に盛行すると指摘された。下総台地の内陸部では平安時代まで使用されている、さらに分布を見ると、下総台地西部から東京湾東岸部に主体的に分布すると分析された。谷口氏は土錘と認識されているが、土玉と置き換えるとその考察を援用することも可能であろう。千葉県内においても、東京低地に近い東葛地区においては、竪穴住居跡から棗玉(谷口分類Ⅱ類)が出土する。地域によって、あるいは時代によっては、祭具としての土玉の選択が行われていたものと想定される。

「マツリ」で使用される石製模造品と土製模造品を考察された篠原祐一氏が指摘^(註40)するとおり、土玉を含めた粗製遺物の認定にあたっては、特徴と遺跡の環境、担当者の判断によるものが大きいことから、判断に苦しみながら分類されたものであろう。そのため土製品研究を難しくしていることはいうまでもない。とは言っても、祭祀遺物とするのか漁撈に伴う遺物とするのかで、とりまとめた結果は大きく異なることとなる。そこから導き出された想定されうる社会構成をも大きく変える結果となる。

榎作遺跡の調査報告書をまとめられた小林清隆氏は、土玉が単独や5点以下の出土が多いことから、生業(漁業)と結び付けて考えるには難があると言わざるを得ないと考察している。筆者も小林氏の想定^(註41)に同意するものである。また、小林氏は、今回事例検討した福岡県那珂川市松木遺跡例から、「カマド廃棄時の祭事行為が確認されている。各種の模造品や手捏土器が出土すれば、それを祭祀行為の所産とみなすことになるが、掛け口閉塞の表徴であるカマド内出土遺物そのものは、祭具とは呼べないであろう。カマド廃棄に伴う破壊から遺物のすえつけまでの行為が「祭祀的な様相」になり、個々の出土遺物からは決して祭祀の実態は究明されてこない。これが、カマド内出土遺物のもつ特質である。」^(註42)と述べている。今回考察した遺構(火処)・遺物(土玉)も同様に祭祀的な様相のみのトレースであり、祭祀の実態にはたどり着けていないものと考えられる。さらに類例を積み上げていく必要がある。

さて、土玉という地味な遺物について、火処祭祀に使用されたであろう痕跡を縷々書き連ねてきたが、今後の検討課題について書き記しておきたい。

①竪穴住居跡における土玉の火処以外への祭祀使用の実態について、②土玉使用祭祀の初現について、③土製模造鏡・土製勾玉・鋤先形土製模造品といった他の土製模造品との関連について、④全国最多の土玉が出土している鳥取県鳥取市青谷上寺地遺跡の性格について等々課題は山積みである。

今後、上記の件について検討していきたい。

《註》

註1 瓦吹堅 2006「土の玉覚書」『史峰』第34号-菅原文也先生古希記念号- 新進考古学同人会pp.39-44

その他に、土玉を祭祀遺物として取り扱った報告書や土製模造品を扱う中で土玉に言及したものもあるが、今回は純粹に土玉を取り上げた瓦吹氏の論考を取り上げた。

註2 馬目順一 1961「千葉県成田市出土の所謂有孔土玉について」『金鈴』早稲田大学考古学研究会pp.29-31

註3 小野真一 1982『祭祀遺跡』考古学ライブラリー10 ニューサイエンス社 pp.110-114

註4 齋藤貴史・清水哲 2008「鳥名熊の山遺跡の土製玉類について」『埋蔵文化財年報 27<平成19年度>』(財)茨城県教育財団 pp.57-66

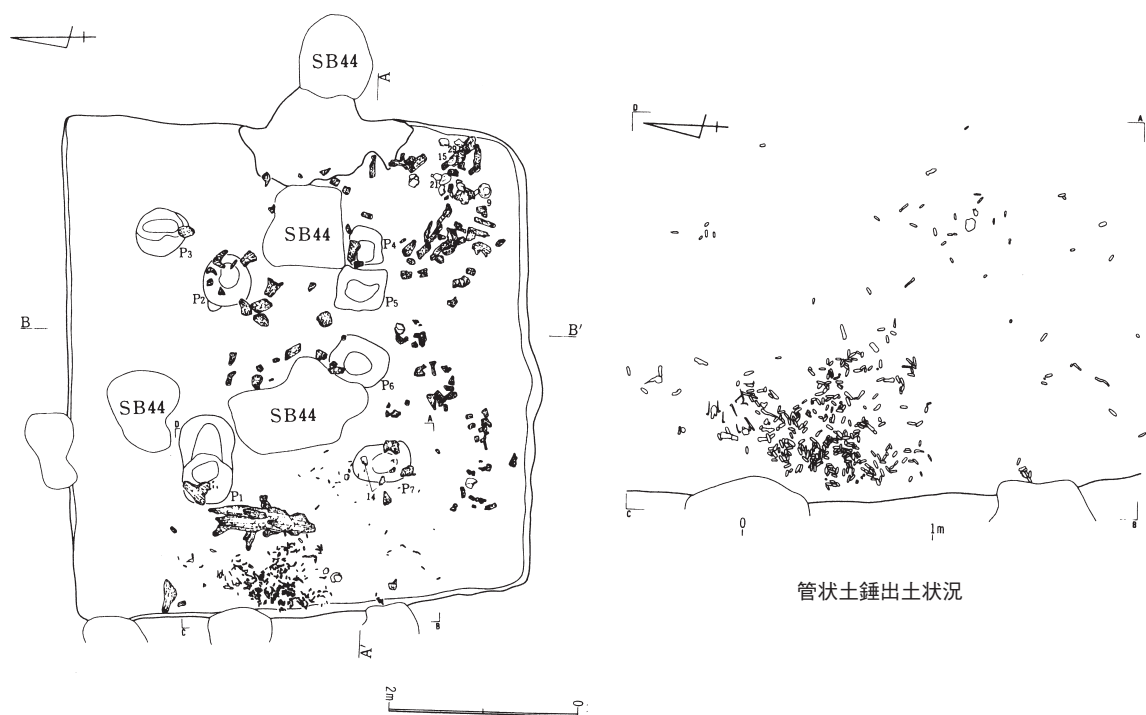
註5 清水哲 2009「鳥名熊の山遺跡」『埋蔵文化財年報 28<平成20年度>』(財)茨城県教育財団 pp.61-69

註6 野中徹 1984「弥生文化期から古墳文化期における魚撈活動-土錘を中心とした房総の魚撈-」『千葉県立上総博物館研究員紀要』第3集 千葉県立上総博物館 pp.14-18

註7 岸本雅人 1984「土錘小考-房総半島における弥生時代以降の魚撈について-」『研究連絡誌』第7・8合併号 (財)千葉県文化財センター pp.6-10

- 註8 土屋治雄・高梨友子 2001「房総における管状土錘について」『研究連絡誌』第61号 (財)千葉県文化財センター pp.1-7 なお、高梨氏は「安房における土製品の祭祀－東田遺跡の調査成果から－」(2006『祭祀考古』祭祀考古学会 pp.8-16)の中で祭祀具として管玉形土製品・土玉を使用している。
- 註9 種石悠「関東地方における原始・古代の土錘について」『物質文化』80 物質文化研究会 p30
- 註10 津野仁 2024『古代の生産と地域支配』同成社 pp.93-121
- 註11 寺村光晴 1973『下総国の玉作遺跡』p145 寺村氏は玉作研究の第一人者であり、玉作遺跡から出土する土玉を玉作製作に利用したと想定された。
- 註12 篠原祐一氏は「祭祀に用いられた石製・土製の遺物が、材質を異にすることによって、どのように位置づけられていたかを再考した。土製品の種類については、亀井の分類を踏襲された。精粗の別があり、とくに粗製品については、遺物の特徴と遺跡の環境、担当者の判断によるものが大きいことから、判断に苦しみながら分類されたものであろう。そのため土製品研究を難しくしている」。土製模造品を手捏土器と土製祭具に分離し、それぞれの時期別地域別の分布を考察された。手捏土器は、古墳時代をとおして関東地方に多く認められる。また、土製祭具も古墳時代をとおして関東が多く認められる。四世紀代～七世紀代をとおして、丸玉(土玉)・勾玉・鏡・管玉といった玉類形代と鏡形が常に認められる基本的組成をなしていると指摘した。
篠原祐一 2008「マツリで使われる石製模造品と土製模造品」『土製模造品から見た古墳時代の神マツリ－資料集－』山梨県考古学協会2008年度研究集会 pp.9-18
- 註13 白鳥章・山口典子ほか 2017『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書11－柏市花前Ⅱ遺跡・花前Ⅲ遺跡・矢船Ⅰ遺跡・矢船Ⅱ遺跡・館林Ⅱ遺跡・寺下前遺跡・八反目台遺跡 縄文時代以降編－』千葉県教育振興財団調査報告第764集 (公財)千葉県教育振興財団
- 註14 上守秀明・大野康男 2013『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書5－柏市駒形遺跡 縄文時代以降編2－』千葉県教育振興財団調査報告691集 (公財)千葉県教育振興財団
- 註15 篠原正ほか 1988『岩戸広台遺跡地区・B地区発掘調査報告書』印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第17集 (財)印旛郡市文化財センター
- 註16 福岡元ほか 1986『酒直遺跡発掘調査報告書』酒直遺跡発掘調査会・芝山はにわ博物館
- 註17 茨城県は、千葉県と同様に火処付近から土玉が出土する遺跡が多く存在する。今回検討したつくば市島名熊の山遺跡の他には、つくば市平北田遺跡では、土製模造鏡が複数出土し、さらに特定の住居跡からは土玉や土製勾玉などが数多く出土している。今後、他の遺跡含めて検証したい。
- 註18 仲村浩一郎ほか 2012『島名熊の山遺跡－島名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地 内埋蔵文化財調査報告書XⅦ－』茨城県教育財団文化財調査報告書第360集 (公財)茨城県教育財団 pp.71-76
- 註19 魚水環 2017『楽中遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第429集 (公財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 註20 富田和夫ほか 1989『中三谷遺跡－県警察運転免許センター関係埋蔵文化財発掘調査報告－』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第76集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 註21 遠坂純伸ほか 2024『反町遺跡－おおた渡良瀬産業団地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－ 第1分冊 A・B・C・D区』太田市埋蔵文化財発掘調査報告書 発行有限会社毛野考古学研究所
遠坂純伸ほか 2024『反町遺跡－おおた渡良瀬産業団地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－ 第2分冊 E区』太田市埋蔵文化財発掘調査報告書 発行有限会社毛野考古学研究所
遠坂純伸ほか 2024『反町遺跡－おおた渡良瀬産業団地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－ 第3分冊 A・B・C・D区』太田市埋蔵文化財発掘調査報告書 発行有限会社毛野考古学研究所
遠坂純伸ほか 2024『反町遺跡－おおた渡良瀬産業団地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－ 第4分冊 A・B・C・D区』太田市埋蔵文化財発掘調査報告書 発行有限会社毛野考古学研究所
遠坂純伸ほか 2024『反町遺跡－おおた渡良瀬産業団地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－ 第5分冊 自然化学分析・考察』太田市埋蔵文化財発掘調査報告書 発行有限会社毛野考古学研究所
- 註22 佐々木隆彦編 1984『松木遺跡Ⅰ』(下巻)那珂川町文化財調査報告書第11集 那珂川町教育委員会 pp.173-181

- 註23 関晴彦編 1977『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XIV-福岡県山門郡瀬高所在大道端遺跡の調査-』福岡県教育委員会 pp.219-221
- 註24 東亜大学校博物館 1981『古蹟調査報告 第五冊 金海府院洞遺跡』
- 註25 柳沼千枝 2012『企画展 火の神 生命の神-古代のカマド信仰をさぐる-』編集:横浜市歴史博物館 発行:(公財)横浜市ふるさと財団 pp.5・6
- 註26 寺沢知子 1992「カマドへの祭祀的行為とカマド神の成立」『考古学与生活文化』同志社大学考古学シリーズV 同志社大学考古学シリーズ刊行会 pp.455-473
- 註27 久松哉須子 1992「カマドをめぐる祭祀」『考古学与生活文化』同志社大学考古学シリーズV 同志社大学考古学シリーズ刊行会 pp.475-488
- 註28 瀬音大 2018『原始・古代日本における勾玉の研究』(早稲田大学審査学位論文)
早稲田大学リポジトリ<https://waseda.repo.nii.ac.jp/records/41239> (最終閲覧日:2022年7月27日)
- 註29 今回の土玉の出土状況を分析するにあたって、大谷弘幸氏が用いた堅穴住居内を16分割する方法を採用して考察してみた。大谷氏は、千葉県内の弥生時代から中近世における炭化種子検出遺構を集成した。穀類としては、イネが主体であり、粟・黍などの雑穀類や堅果類が少量含まれる傾向であることを指摘した。またモモについて着目し、モモの出土状況を柱穴・カマド・炉・梯子穴を結んだ線により16分割し、時期別に比較検討された。それによると、モモの出土状況は、古墳時代前中期には炉の反対側のコーナー部分に、後期になると住居の中心部の覆土中から多く出土しており、古代になるとカマド周辺に集中することを指摘された。さらに共伴する遺物としては、古墳時代中後期では玉類は手捏土器・土玉が、古代では鉄製品(特に刀子)が多く出土していることを明らかにされた。このことから、大谷氏は、古代では、堅穴住居跡の埋没過程において周辺で行われた祭祀行為の後に祭祀に使用した品物とともにモモが投棄された可能性を指摘し、奈良時代以降にはカマドに対する意識がより強くなり、カマド廃絶に伴いモモを使用した祭祀行為を想定された。(大谷弘幸 2002「第6章 炭化種子から見た農耕生産物の推定」『千葉県文化財センター研究紀要』23 (財)千葉県文化財センター pp.141-179)
- 土玉の出土状況を16分割法で検討した結果、土玉は出入り口周辺やコーナー部分、カマド周辺、貯蔵穴周辺から出土している状況を看取することができた。また、小型の土玉を選択している遺跡もあった。今回は、火処を中心として土玉の出土状況を分析したが、検討結果については、別稿にて報告したい。
- 註30 秋本吉郎校注 1958「播磨國風土記」『日本古典文学大系2 風土記』株式会社岩波書店 pp.294・295
- 註31 雨宮龍太郎ほか 1998『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書XII-白井町一本桜南遺跡-』(財)千葉県文化財センター pp.233-237
- 註32 柿田祐司・布尾和史 2005『野々市町末松遺跡-一般国道157号鶴木バイパス改築工事にかかる埋蔵文化財発掘調査報告書-』石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター pp.66・69・71・72・115
- 註33 乙益重隆 1992「3 壺に埋納した玉」『人類史叢書13 弥生農業と埋納習俗』六興出版 pp.329-340
- 註34 “山梨県/山梨の遺跡発掘点2021デジタルミュージアム金山遺跡”
<https://www.pref.yamanashi.jp/maizou-bnk/isekiten/isekitendigitalmuseum2021/10kaneyamaiseki.html> (最終閲覧日:2024年12月4日)
- 註35 秋本吉郎校注 1958「常陸國風土記」『日本古典文学大系2 風土記』株式会社岩波書店 pp.78-81
- 註36 篠原浩恵 2003「笱形土製品神饌具考」『祭祀考古学』第4号 祭祀考古学会 pp.15-34
- 註37 向日市教育委員会 2004『長岡京跡ほか』向日市埋蔵文化財調査報告書第63集 編集:財団法人向日市埋蔵文化財センター pp.77-105
- 註38 漁網の土錘としての出土状況の例としては、極めて少ないが、神奈川県綾瀬市宮久保遺跡がある(第13図)。S I 115(9世紀後半)からは天井裏の収納場所が焼け落ちた堅穴住居跡である。その西壁側には管状土錘が273点集中して出土している。出土状況から漁網が想定される例である。國平健三・長谷川厚 1990『宮久保遺跡Ⅲ』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告15 神奈川県立埋蔵文化財センター pp.406-417



第13図 宮久保遺跡（神奈川県綾瀬市）SI115

註39 谷口 榮 1996「東京低地・中川低地の土錘について－元荒川・中川流域における土錘の素描－」『埼玉地域文化の研究 下津弘君・塚越哲也君追悼論文集』下津弘君・塚越哲也君追悼論文集刊行委員会 pp.317-328

註40 註12に同じ

註41 小林清隆 1989「カマド内出土遺物の意味について」『研究連絡誌』第24号（財）千葉県文化財センター pp.16-21

註42 註41に同じ

《参考文献》

亀井正道 1981「土製模造品」『神道考古学講座』第3巻 原始神道期二 雄山閣出版 pp.41-68

西谷 正 1983「加耶地域と北部九州」『九州歴史資料館開館10周年記念 大宰府古文化論叢』上巻 九州歴史資料館編 pp.33-72

佐々木隆彦 1984「VI総括にかえて 1 竈祭祀考－北部九州を中心として－」『松木遺跡Ⅰ』那珂川町文化財調査報告書第11集 那珂川町教育委員会 pp.173-181

東日本埋蔵文化財研究会 1996『古墳時代の祭祀－祭祀関係の遺跡と遺物－』

中山俊之・石戸啓夫 1997『大竹林畑遺跡－成田市都市公園5・5・4坂田ヶ池総合公園事業地内埋蔵文化財調査－』（財）印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第125集（財）印旛郡市文化財センター pp.175-177

赤崎敏男 1998「1 鏡と玉」『古墳時代の研究』第3巻 雄山閣出版株式会社 pp.131-142

瓦吹 堅 1998「土製鋏先模造品覚書」『常総台地』14 常総台地研究会 pp.65-95

折原洋一 2003「古墳時代土製模造鏡の類型と拡散に関する覚書」『研究紀要』第5号 山武考古学研究所 pp.25-34

狩野敏次 2004『ものと人間の文化史 117 かまど』（財）法政大学出版局

的野善行 2005「関東地方出土の土製勾玉について」『埼玉考古』第40号 埼玉考古学会 pp.45-66

塩谷 修 2005「古墳時代古霞ヶ浦沿岸社会の論点－考古学による内海社会と地域形成史の研究に向けて－」海と考古学』海交史研究会考古学論集刊行会 有限会社六一書房 pp.1-9

田中 裕 2005「国家形成初期における水上交通志向の村落群－千葉県印旛沼西部地域を例として－」海と考古学』海交史研究会考古学論集刊行会 有限会社六一書房 pp.331-353

鉦持輝久 2006「三浦半島の弥生時代から平安時代における網漁について」『坂詰秀一先生古稀記念論文集 考古学の諸相

- Ⅱ』坂詰秀一先生古稀記念会 pp.967-982
- 埋蔵文化財研究会 2007『第56回埋蔵文化財研究集会 古墳時代の海人集団を再検討する - 「海の生産用具」から20年 -』
- 大平 茂 2008『祭祀考古学の研究』株式会社雄山閣
- 山梨県考古学会 2008『山梨県考古学会2008年度研究集会 「土製模造品から見た古墳時代の神マツリ」資料集』山梨県考古学会
- 入江俊行 2009「古墳時代祭祀における土製模造品の出現と展開」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第13集 帝京大学山梨文化財研究所 pp.111-123
- 近藤康久 2009「文化動態をできるだけ正確に把握するための標準化時間確率モデリング - 東京・横浜地域の縄文網漁を題材に -」『東京大学考古学研究室研究紀要』第23号 pp. 1-28
- 糸川道行 2009「奈良・平安時代における竪穴建物廃棄の祭祀 - 千葉県四街道市小屋ノ内遺跡出土土器群を中心として -」『研究連絡誌』第70号 (財)千葉県教育振興財団 pp.43-58
- 太平茂 2010「祭祀遺物から見た古代祭祀の継承と断絶」『椋山林継先生古希記念論集 日本基層文化論叢』椋山林継先生古希記念論集刊行会 pp.89-100
- 塩谷修 2011「古代筑波山祭祀への視覚 - 内海をめぐる交流・交通と祭祀の源流 -」『東国の地域考古学』川西宏幸編 pp.219-242
- 柳沼千枝 2012『企画展 火の神 生命の神 - 古代のカマド信仰をさぐる -』編集：横浜市歴史博物館 発行：(公財)横浜市ふるさと歴史財団
- 白井久美子・木原高広ほか 2012『研究紀要27 古墳時代中期の房総 - 中期的要素の波及とその評価 -』公益財団法人千葉県教育振興財団
- 比田井克仁 2013「関東における在来祭祀と青銅器祭祀」『技術と交流の考古学』(株)同成社 pp.525-536
- 坂江 渉 2022「『風土記』の荒ぶる神の鎮祭伝承と倭王権の地域編成」『ひょうご歴史研究室紀要』第7号 兵庫県立歴史博物館ひょうご歴史研究室 pp.40-67
- 杉山和徳 2025「大宮台地白岡支台の古墳時代土錘」『埼玉考古』第60号 埼玉考古学会 pp.21-34

※脱稿後、穂積裕昌 2025「伊勢・志摩の漁撈具と漁法」『三河考古』第34号(土生田純之先生追悼論文集) 三河考古学談話会 pp.133-152が刊行された。穂積氏は土玉(球状土錘)について、房総漁師の談や鳥取県青谷上寺地遺跡でヒノキの輪に土玉が通している例があるものの、土錘として利用されていた民俗事例もあることから、遺跡の性格や共伴遺物なども勘案したうえで、土玉か土錘かを個別に判断していく必要があると指摘している。

※本稿脱稿後、合田茂伸・合田幸美 2025『竈と住まいの考古学』(株)同成社が刊行された。「第3章 古墳時代中期の竈」2 古墳時代中期の竈の諸形態(3) 竈からの出土遺物(pp.38-39)で、カマド出土の遺物(土玉を含む)を考察されている。カマド構築時及びカマド廃棄時に伴う祭祀を推定されている。